



「遅くあくる」

『蜻蛉日記』は、藤原道綱の母（藤原倫寧の娘）が、道長の父でもある藤原兼家との関係をつづった日記である。その中に、百人一首にも選ばれた次の歌がある。

嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は
いかに久しきものとかは知る

この歌に対する兼家の返歌は

げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸も
遅くあくるは苦しかりけり

（本当に言われる通り、冬の夜はなかなか明けずつらいものだが、冬の夜でもない真木の戸も、なかなか開けてもらえないのはつらいものと思ひ知ったよ。）

さて、とりあえず訳を示しておいたが、「遅くあくる」の部分に注意したい。真木の戸は、結局は開いたのか、開かなかったのか。「遅くあくる」だから、結局は開いたように思うが、『蜻蛉日記』には、

さなめりと思ふに、憂くて開けさせねば、
例の家とおぼしき所にもものしたり。

（兼家が来たようだと思うが、やりきれない気分、戸を開けさせずにいると、例の女の家と思われる所へ行ってしまった。）

とあって、開けていないことが分かる。

では、それを踏まえて練習問題。次の傍線の主語は誰で、どう訳すか。

昔、紀有常のがり行きけるに、歩いて遅く来ければ、詠みてやりける。

君により思ひ慣らひぬ世の中の
人はこれをや恋といふらむ

（「伊勢物語」第三七段）

答えは、まず主語は紀有常。訳は「外出して帰ってこなかったのだから」となる。つまり、「遅く」は、在原業平がいる間には、訪

問の相手が帰ってこなかったということを表しているのである。古語では、判断の時点、つまり話し手のいる立場でのことが話題になるので、その時点で「遅く」ということは、「まだ来ていない」という意味になるのだから、その後で来たかどうかは問題にされていないのである。

こう考えると、『蜻蛉日記』の「遅くあくる」のイメージもなんとなく掴めるだろう。兼家が「げにやげに」を詠んだ時点では、戸はまだ開いていないのだから、それを「遅くあくる」と詠んだのである。その後、戸が開いたかどうかは表現されていない。

現代語でも、待ち人が来ていない時には「彼、遅いね」という言い方をする。つまり、「ある時間になってもそうならない」という意味を表す点では、現代語も古語も変わりがない。しかし、古語では「遅い」という時点に視点をおいて述べているのに対して、現代語では、視点をずらしてどうであったのかを述べることに重点が置かれているのであり、それが解釈の違いとなると考えられる。

○遅く出づる月にもあるかなあしひきの

山のあなたも惜しむべらなり（古今集）

（待っていてもなかなか出てこない月であるよ。

山の向こう側でも、月がこちら側に移って来てしまうのを惜しんでいるに違いない。）

○花散ると厭ひしものを夏衣

たつや遅きと風を待つかな（拾遺集）

（春には花が散るから嫌ったけれども夏衣を裁って着たと同時にまだ吹かないのかと風の吹くのを待っていることだ。）

* 山口明穂『日本語の論理』（大修館、2004）を参照。